

1

(1・2・3・4・9 各完答)

I 俗

II

信

2

I

感

II

内

3

③

こ

き

④

二

4

1

イ

2

ア

3

エ

5

こ

ぼ

れ

6

ウ

7

た

し

か

に

8

た

ま

9

A

エ

B

ウ

C

ア

10

ウ

11

a

意

味

b

生

命

c

身

辺

d

根

本

2

(5・6 各完答)

1

a

上

等

b

無

礼

者

c

観

念

2

高

岡

3

う

つ

ろ

4

ア

5

A

息

B

金

6

1

ア

2

エ

3

イ

7

(記述題)

8

ウ

9

ア

10

な

ぜ

11

切

腹

12

ウ

2

7

切腹されては迷惑だとい
りよりの言葉が、武士の名
誉を傷つける失敬なもので
あると受けとめた。

(同意可)

配点

11 21 各2点×7=14点

27 6点

その他 各4点×20=80点

100点

- 1 ① 線①前後に答えになりそうな言葉がないが、——線と同じことが（A）で始まる一文に書かれているのでその周りにヒントがないか探せばよい。また、主題に関わる部分なので通読時に筆者の伝えたいことに意識が向いていれば、答えの見当がついただろう。
- 2 直後の「猿飛佐助」の例が——線②の問いかけについて考えるヒントになっている。その後、「雑用をしているうちに、いつとはなしに師匠に感化され」ることを指して、次の段落で「人間形成のコンポン」と言い、それをまた次の段落で「内なる人間の完成」と言いかえ、それがなされれば「作品はごく自然とあふれ出る」という流れになっている。
- 3 ③遠慮なしに人を働かせることを「こきつかう」と言う。④「反省のハの字もない」のようにその言葉のはじめの一字がないという言い方でそのような態度や動きがまったくないことを強調している。
- 4 1には猿飛佐助の例が筆者の考えうる教育そのものだということなので、「まちがいがなく」の意味になる「まさに」が入る。2は厳しい修行をすることが筆者には少しもできそうにない、ということなので「まったく」が入る。3では雑誌について祈る気持ちを表す部分なので「どうか」が入る。
- 5 同じ意味の言葉を探せばよいが、どちらもよい詩が出てくるさまを表していることに気づけば見つけやすかっただろう。
- 6 「ても」は「そうなる」と予想とは違うことが起こる」という意味の「仮定の逆接」の働きを持つ言葉であるのでイかウが答えとなる。——線⑥後半は「心境」について書いているのでウが正解となる。
- 7 この「なるほど」は、説得力を増すためにいったん相手の意見を認める「譲歩」と言われる働きをしている。
- 8 「心」＝「たましい」、「ふるわせる」＝「ゆり動かす」という言葉の対応でも答えは見つかるが、どちらもすばらしい作品にふれた心の動きであることも探そうえでヒントになる。
- 9 Aは、よい作品を作るための修行ができない↓（A）↓詩人になれないというつながりなので順接の「だから」が入る。Bは、永久に詩人になれないことと本質的に詩人でもないことをならべているので「また」が入る。Cは、信仰することと心が無心に近づく↓（C）↓ほくには信仰心がない、というつながりなので逆接の「しかしながら」が入る。
- 10 Aは問2にもあったとおり、先生に感化され人間形成することが作品を作ることにつながっていたので誤り。イはよく言われそうなことであるが、本文では書かれていない。エの「悟りの境地」は「芸術の透明な核心部」である「無心」に「似たもの」として書かれており、詩を作ることに直接関わらないので間違い。ウは「八木重吉」で始まる段落に書かれていることである。
- 11 a「意味」は「味」のつくりが「末」にならないように気をつけよう。b「生命」は「命」のふしづくりにあたる形をていねいに書くべきである。c「身辺」は「身の回り」という意味である。d「根本」は「根本的」という熟語でもよく使われるので覚えておこう。
- 2 ① a「上等」の「等」は、たけかんむりである。b「無礼者」は「無」を「不」にしたり、「礼」を「札」にしないように気をつけよう。c「観念」は「観念する」で「あきらめる」という意味になる。「観」を「飲」や「勸」としないように気をつけよう。
- 2 誰が心づけを出したのか考えていけば簡単だっただろう。一語という指示にも慣れてほしい。
- 3 思いなやんでいる高岡の様子はいろいろなところで書かれていた。その中から目に関わる部分を探すと（2）の次の文に「かつと開いた目は、うつろだ」と書いてある。
- 4 問3と同じく思いなやんでいる高岡の様子にあてはまるものを選ぶ。「思い立つ」は「あることをする気になる」、「思い上がる」は「うぬぼれていい気になる」という意味である。
- 5 Aは障子を開けると切腹をしようとしていたのでおどろいたのであるから「息を呑む」となる。Bは高岡に切られそうになり、恐怖と緊張で動けない様子だったということなので「金縛り」となる。
- 6 1は首をすくめるようすなので首の動きが印象的な「亀」が入る。2は「口をあんぐり開けている」様子なので「幼い子」か「鯉」が入ると考えられるが、「幼い子」は3に入るため「鯉」が正解となる。人やほ乳類と違い、気持ちを読み取れない魚の目はよくうつろな目のたとえとして使われるので覚えておこう。3は両手で顔を覆う様子なので「幼い子」が入る。立派な侍であるはずの高岡が幼い子のように見えるほど弱々しい様子であることを表している。
- 7 まず、「余計なこと」がどの言葉を指しているのかを確かめると、Aの四行後のやり取りから高岡が刀を抜いているのでこの部分に問題があると見当がつけられる。「余計なこと」とあるのでこのやり取りの何がよくないのかと考えると、高岡の言葉から町人であるりょうが武士である高岡に失敬な態度をとったと書いてあるのでそれを中心にとまとめていけばよい。
- 8 いずれもマイナスの心情を表す言葉であるが、それぞれ意味は違っている。ここでは「余計なこと」を言わなければよかったという気持ちなので「後悔」がふさわしい。
- 9 刀が光るということは光の当たり方が変わったか、刀の角度が変わったかである。刀が光った後でりょうが「今度はだめだ」と観念していることからここではまだ高岡がりょうを切ろうとしていることがわかる。
- 10 ——線⑦で「畳がゆらいだ」とあるのに対し、三行後に「さっきのゆらぎは」とあるのでこの部分が結びついていることがわかる。この一文では何が起きたかわからないので、具体的に様子が書かれた一文を前後から探していくと答えが見つかる。
- 11 もともと切腹しようとしていたことを思い出したのである。「脇差」を「自分に向ける」というのがどういう様子かがイメージできればさらに答えやすかっただろう。
- 12 宿のことを気にするあまり高岡の怒りを買ってしまふところは気が回っていないと言えるが、高岡が刀を捨てた後も放っておかずに切腹を思いとどまらせようとしているところは人を思いやる温かさがあるといえるだろう。